

Title	二ホンザルの実験的行動分析における基礎的研究
Sub Title	
Author	浅野, 俊夫(Asano, Toshio)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1976
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.16 (1976. )
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学事報告：学位授与者氏名及び論文題目：博士
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000016-0091">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000016-0091</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「産業化と近代化の間のズレ」を照明するならば、本章はもっと実りのあるものになったはずである。

これまで各章別になしてきたものを総括すると、次のことが指摘される。

本論文の最大の特徴は、社会的成層研究の学説史的検討に重点が置かれていることに求められる。既存理論の広範囲にわたる克明な文献探査に、本論文の学問的価値が見出される。これに基づいて、筆者自身の理論を体系化しようとしている点において、努力のあとが見られる。

第一部の理論的研究に比べると、第二部の個別的歴史研究は見劣りがする。第六章は成層研究を叙述するにとどまっているし、第九章はアジア諸国についての研究の紹介を越えていないくらいがある。第七章のホワイト・カラーの分析は問題点を明確にしていることでは力作である。しかし、原爆被災を対象とした第八章は、本論文の全体的構成から見れば除外するほうが適切ではなかろうかという意見も出てくる。

筆者自身の成層理論を体系化しようとする努力は高く評価されるが、その体系化の主要概念に若干の不明確さが残っている。

比較研究に際して、比較する事象の文脈的把握の重要性を指摘するのは適切である。しかしながら、どのようにして文脈的把握を操作化するかについて明言していないのは惜しまれる。事象とそれが示めす資料がその全体

的文脈をどれほど代表しているかを明らかにする具体的手続が明示されていない。第一部の理論的研究が第二部の個別研究と噛み合っていないということと、これは無関係ではあるまい。

文脈的把握の具体的内容は、①人口構造、②産業構造、③労働市場と労働運動、④教育に分類されている。しかし、これらについての具体的論述はほとんどなされていない。産業化を共通の下敷としているようであるが、「文化差」の分析視角が明確に打ち出されていない。

成層構造分析の主要変数として、①制度的状況、②成層化の基準、③資源配分、④生活構造、⑤階級形成と階級関係という五つの項目が取り上げられている。しかしながら、五項目に限定した理由は積極的には明らかにされていない。さらに、各項目についての説明はあるが、その相互間の関連についてのそれは断片的なものに終わっているので、説得力に欠ける。

本論文は筆者の十数年来の学説研究の成果であり、その価値はこの点で認められる。社会的成層の比較研究という複雑な問題に立ち向うに当たっては、現在の研究水準からして、幾つかの不備は許容されなくてはなるまい。社会的成層の学説史的検討というべき優れた内容を持つ本論文を通じて示されている川合隆男君の独創的研究は同君に社会学博士の学位を与えるに足りるものと認める。

## 博士 (乙)

### 文学博士

第 804 号 浅野俊夫 昭和50年9月23日

ニホンザルの実験的行動分析における基礎的研究

〔論文審査担当者〕

主 査 慶応義塾大学 文学部教授 文学博士 小川 隆  
大学院社会学研究科委員

副 査 同 同 印 東 太 郎  
同 同 斎 藤 幸一郎

〔論文審査の要旨〕

ニホンザルに関する心理学的視点からの行動研究は従来、数少かったが、京都大学霊長類研究所の開設により、この方面の部門が研究所に置かれ、一層の研究成果が期待されて来た。本論文は研究所の開設当初から研究員として実験施設、資料集録システムの作成に苦心した筆者が心理学における実験的行動分析の適用についての方法的基礎研究を行ったものである。論文の構成はニホン

ザルについての実験的行動分析の意義を述べた第一部、理論的展開と 第二部 この見地から行った実験的検証である実験報告とに分れる。

第一部では、1で生物科学における行動研究の現状を論考し、本論文で扱う行動を個体が個体として環境と接触している状態と定義し、種として、神経系として、あるいは遺伝子として接触している状態から区別し、これを研究する上に現象的特質を課題とする場合と発生過程を課題とする場合とがあると指摘する。つづいて2では生得的反射行動、刻印づけ、条件反射、オペラント条件づけがそれぞれにみられる行動の現象的特質は異なるとしても、発生過程として一つの体系の中に位置づけられることを主張し、実験的行動分析による記述的方法論的妥当性を論じている。この記述によって特に行動の形成が個体の環境の働きかけで始まり、強化の随伴性に存し、かつ反応型に任意性があるオペラント条件づけという発生過程が個体の環境適応という点から重視されるとしている。この見地にたつて3では従来のサル類の学

習行動の実験的研究を概観し、そこで行われているのが弁別刺激に関するものが多く、強化による行動の形成、維持に関する研究が少いことを指摘し、オペラント行動分析の導入の必要を論じている。まづ、参考論文その他で既に発表した筆者らの実験報告によってレバー引き行動のオペラント条件づけの形成で反応型の任意性を実証した後、サル類研究で従来、用いられているWC T A装置が弁別刺激、操作体、強化刺激の提示が独立に操作できないため、弁別刺激、反応型出現、強化の分析が困難な点、また、実験手続として一般的である断続試行手続がそれ自体、試行間隔中のオペラント自発の物理的禁止となっている点を批判し、自由反応場面での実験手続との比較を行った第二部の実験の意義が論じられている。一方、自由場面におけるオペラント行動と強化スケジュールに関する研究がサル類では少く、殊にニホンザルでは皆無であることから、オペラント自発頻度に関する基本的強化スケジュールの効果を吟味した第二部の実験II、IIIにより、結果の種を超えた一般性が述べられている。尚、4では意識の概念にふれ、ヒトに関する筆者の参考論文を引用し、意識はオペラント行動の弁別刺激として扱うことができるという見解が主張されている。

第二部ではニホンザルの分化学習に及ぼす断続試行手続の影響を明にした実験Iと基本的強化スケジュールを吟味した実験II、IIIが報告されているが、それに資料としてニホンザルにおける体重統制手続の標準化が添加されている。実験Iでは第一部の趣旨に従って弁別刺激と操作体を分離し得るような装置が開発され、これによって断続試行場面と自由反応場面との分化学習が比較され

ている。結果は断続試行場面ではオペラント自発が大きな抑制をうけるのみならず、断続試行場面よりも自由反応場面で分化学習が促進されることを明確にした。実験IIでは自由反応場面で定反応比率強化と変動反応比率強化のオペラント行動への効果が吟味され、反応の累積記録に他の種との同型がみ出されている。実験IIIでは定時間隔強化と変動時間隔強化が検討され、同様に他の種と同型の累積記録が得られたが、定時間隔強化においては時間による反応統制が特に顕著な点のみ出されている。

本論文の構成は前記のように第一部理論的展開によって第二部実験報告を位置づけようとしたものであるが、理論的展開の論考は広般にわたり、実験報告によって総てを実証したとはいいい難く、特に4でふれた意識に関する見解は実証研究からは逸脱した感がある。しかし、本論文の本来の意義は、今後、ニホンザルの実験的行動分析を行う上に不可欠な方法論的基礎を明にした研究とみるべきであり、その点では、弁別刺激、操作体、強化刺激を分離して実験操作し得る装置を自ら開発した点、従来のサル類研究で一般的に採用されていた断続試行手続の難点を吟味し、自由反応場面での実験操作の妥当性を実証した点、また、従来、異った条件下では部分的に行われていたサル類の、尚、ニホンザルでは皆無の基本的強化スケジュールに関する研究を同一条件下で組織的行った点、その結果、ニホンザルにおいて特有の時間による反応統制の事実のみ出した点は、この方面の本格的実験研究として特に評価されるものである。

本論文によって筆者は文学博士の称号を受けるに値するものと認める。